

Title	プルウドンの財産論とその独逸に於ける反響
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1929
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.23, No.6 (1929. 6) ,p.791(21)- 861(91)
JaLC DOI	10.14991/001.19290601-0021
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19290601-0021

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

經濟界に於ては特に最も獨立自尊の主旨を服膺し、如何なる名稱を以てするに拘はらず、苟も此の氣象、此の精神を沮喪せしむるの傾向ある事は斷じて之を排斥し、人々各々其の天賦の能力を完全に行使して、崇高なる個性の發展を圖り、政府若くは他人に依頼して、事を爲さんとするの大耻辱たることを痛感しなければならぬのである。米人シェンクス氏曰くキリストは何よりも適切に個人の價値を尊重し、人間は各自分て其の生活狀態を決定するの責任に當り、僧侶や父母に其の責任を負はしむべからずと云ふ大主義を鼓吹した第一人者である」と、是れ即ち、我が福澤先生が獨立自尊の四字を以て云ひ現はして居らるゝ大主義である、余は經濟上に於て特に此の大主義の貫徹を期待するものである。(終)

ブルウドンの財産論とその 獨逸に於ける反響

加田 哲 二

昨夏發行の改造社版「マルクスメンゲルス全集」第十二卷に余はフリードリッヒ・エンゲルスの筆になれる「住宅問題」(Zur Wohnungsfrage. Separatdruck aus dem "Volksstaat" von 1872. Zweite, durchgesehene Auflage Zürich 1887)の翻譯を寄せた。今春その改譯を企て、譯稿が出来上つたので、これに對する解説として「ブルウドンとマルクス」なる一文を草する意圖を有してゐる。以下の文章はその一節である。

一

フリードリッヒ・エンゲルスの著作「住宅問題」はアルツウル・ミュールベルガアの住宅問題に關する「民衆國家誌」上に發表せられた論文を機縁として書かれたもので

ある(註一)。而して、ミューベルガアはエンゲルスの認めるやうに、獨逸におけるプルウドン主義の代表者であつた。この點について、エンゲルスによれば「ミューベルガアは余が彼をプルウドン主義者と名づけたことについて、特に甚だしく不満であり、彼はプルウドン主義者でない」と斷言する」といつてゐるのであるが、エンゲルスはこれに次いで「乍併問題になつてゐる論文——而して余はその論文だけについて、關係があるのである——が純粹なプルウドン主義以外の何ものをも包含してゐないことについては、證明をしよう」といつてゐる(註二)。更らに、プルウドンその他の無政府主義に對して、深い智識と同情とを有する無政府主義史家マックス・ネットロウの如きも、ミューベルガアをもつて「唯一の獨逸プルウドン主義者」といひ「彼(ミューベルガア)はプルウドンの思想に甚だ忠實であつたので、彼によるプルウドン思想の何等かの發展はよくこれをなし得なかつた」といつてゐる(註三)。

註一 エンゲルス住宅問題序(一八八七年)參照。

註二 住宅問題第三篇一、參照。

註三 Max Nettlau, Der Vorfühling der Anarchie Ihre historische Entwicklung von den Anfängen bis zum Jahre 1864. 1925. S. 168.

ミューベルガア自らも、プルウドン研究家または讚美者をもつて任じてゐたことは争はれない。彼は一八九一年に「プルウドン研究」(註四)を、一八九九年には「プルウドン生涯と事業」(註五)を刊行してゐる。而して、彼のプルウドンに對する態度は甚だ讚美的、肯定的である。彼はプルウドンをもつて「第十九世紀佛蘭西における最も獨創的にして、最も深遠なる社會哲學者の一人」といひ「今日佛蘭西が國家社會主義と社會的、政治的空論主義一般をまた理論的にも克服したとすれば、それはその本質において、プルウドンの貢獻である。故に、彼を知ることが吾々にとつて大なる興味である」といつてゐる(註六)。またミューベルガアはマルクス批判の小著には次の如くいつてゐる。「マルクスイズムは哲學的、歴史批判的、社會政治的にいへば、獨創的價值なきものである。何となれば、マルクスにおける眞理なるものは、カール・マルクスやフリードリッヒ・エンゲルスに由來するのではなく、反つてフォイエルバッハ、シュチルナー、プルウドン等の如き思想家に由來するのである。このことに關する根本的誤解がこの社會的神秘説の新らしい、而して恐らくは最後の形態の源泉となつたのである」(註七)。

註四 Studien über Proudhon Ein Beitrag zum Verständnis der sozialen Reform. Stuttgart. 1891.

註五 P. J. Proudhon Leben und Werke Stuttgart. 1899.

註六 Studien über Proudhon, Vorwort.

註七 Mühlberger, Zur Kenntnis des Marxismus Kritische Skizzen. 1894. Vorwort.

かくの如くして、ミュルベルガアがプルウドン主義の讚美者または代辯者としての立場を保有し、従つて、エンゲルスがミュルベルガアの住宅問題に關する議論をプルウドンまたはプルウドン主義の所説としたことは、當然のことといはねばならぬ。素より、エンゲルスの「住宅問題」はプルウドン、ミュルベルガアの住宅問題解決策についての批判であるとともに、エンゲルスがブルジョアジイの代辯者と認めるところのホミイル、ザックスのそれに對する批判でもある(註八)。而して、これらの批判はそれ自ら獨立の議論として繕讀しても尙ほ興味あるところであるが、マルクス主義のプルウドン主義克服の一繼續事業として見るべき一層の理論的並に思想的興味を吾々に與へるのである。この批判的克服的著述の意義について、エンゲルスは吾々に次の如く語つてゐる。

「かくてプルウドン主義がラテン系諸國の勞働者においても、確實に驅逐せられ

たとしたならば、而してプルウドン主義がたゞ尙ほその本來の性質に適應して、フランス、スペイン、イタリヤ、ベルギーのブルジョアの急進主義者に、彼等のブルジョアの並に小ブルジョアの熱望の表現として、役立つに過ぎないとしたならば、何故に今日尙ほプルウドン主義に歸つて論ずる必要があるか。何故に事新らしく、この論文の再刷によつて、既に死せる論敵と戦ふ必要があるか。

第一には、この論文がプルウドン及び彼の獨逸に於ける代表者に對する論争に限定してはゐないからである。マルクスと余との間に成立してゐた分業の結果として、定期刊行物において、従つて反對の見解との抗争において、吾々の見解を代表することが自分の役目であつた。かくてマルクスは彼の偉大なる主著の完成のために、その時間を保留することが出来たのであつた。かくの如くにして、余は吾々の考へ方を、殆んど他の考へ方に反對する論争の形ちで、叙述する地位に置かれた。この場合もさうである。第一編及び第三編は單に問題のプルウドンの見解の批判を包含するのみでなく、吾々自身の見解の叙述を含んでゐる。

第二には乍併、プルウドンは歐洲勞働者運動の歴史において、無造作に忘却裡に埋もれてしまひ得るには、餘りに著しい役目を演じたのであつた。理論的には清算せられ、實際的には主流から押し退けられたが、彼は尙ほ彼の歴史的興味を保つてゐる。何人でも近代社會主義に對して、ある程度まで深く研究せんとする人は、この運動の「克服せられた色々の立場」について習得しなければならぬ。マルクスの「哲學の窮乏」はプルウドンが社會改良の實際的諸提案を開陳する數年以前に現はれたものである。マルクスはこの著書において、たゞプルウドンの交換銀行をその萌芽において發見し、批判し得たに過ぎなかつた。従つてマルクスの著述はこの方面において、遺憾のことには甚だ不十分ではあるが、余のこの著作によつて補はれるのである。マルクス自身がこのことをなしたならば、恐らくすべてを數等よく且つ適切になしたに違ひないであらう(註九)。

註八 住宅問題 第三篇 參照。

註九 住宅問題 序文

エンゲルスの以上いふところによれば、彼の「住宅問題」は、ミュールベルガアの住宅問題に對する批判であるが故に、従つてまたプルウドンの社會改良の實際的提案に對する批判であつて、一八四七年のマルクスの「哲學の貧困」がプルウドンの理論的批判の補遺をなすものである。而して、マルクスのプルウドンの理論的批判とエンゲルスの實際的提案の批判との間には、二十數年の時日の経過があることも、プルウドンにおける實際的提案への進出がある。この兩者の批判を把握することによつて、マルクシズムのプルウドン批判または克服を理解し得るのである。而して、この批判または克服の意義を知るためには、(一)マルクス、エンゲルスの當初からのプルウドンとの關係、(二)獨逸社會主義におけるプルウドン影響、(三)マルクスのプルウドン批判及び克服などの事情を明かにするとともに、他方において、プルウドンの立場、並にプルウドン主義よりするマルクシズム批評を知るところがなくばならぬ。かゝる全般的視野の下にプルウドン——マルクスの關係を見ることによつて、「住宅問題」の意義を把握し得る。而して、更らにマルクシズムとアナルヒズムとの關係の一部を知ることが出来るのである。かゝる諸關係の解明こそ、エンゲルスの「住宅問題」に對する充分なる解説として役立つのである。勿論以

下の叙述が「充分なる解説に價するかどうかは讀者諸君の批判に待たねばならぬところである。

二

一八〇九年ベサンヌの附近に生れたブルウドンはプロレタリア出身の社會主義理論家であつた。彼は父として桶職を、母として女中を持つたのであつた。七才から十二才まで牧童として送り、更らに印刷工に轉じ、植字並に校正掛りとなり、この職をもつて、佛蘭西全國を歴遊し、巴里に滞在した。こゝで一八三八年ベサンヌ學士院から、その舊時のイスラエル民族における日曜休日の効用に關する論文によつて、賞金を與へられた、これがため長期に渉る巴里滞在が可能となつたのである。

ブルウドンの「日曜論」はモオゼの立法に關する社會哲學的研究である。彼は聖書の中發見した社會主義的古代の研究をもつて、その研究の使命を始めてゐる。彼は道德、保健、家族並に國家生活の見地から、猶太の安息日並にその後繼である基督教の日曜日は外にこれに比すべきものがないことを論證した。彼はモオゼを

哲學者で社會主義者であるとした。彼は古代猶太民族において、後世の諸民族に於いては、失はれてゐる包括的なる統一を發見した。指導者の天才は一種の攝理的本能となり、この本能は第七日の休日において、全國民の完全なる平等を宣言し、數千年前既に「自由、平等、博愛」の革命的標語を傳へてゐるのである。それのみではない。ブルウドンに對しては、民族生活に對する數並に量の導入は、人が發明するのではなく、發見しなければならぬ「社會學」の基礎を與へたものであつた。而して、この科學の目的は「社會的平等の状態を發見することである。社會的平等の状態とは、財の共有でも、專制主義でも、財の細分でも、無政府でもなく、反つて、秩序における自由であり、且つ統一における獨立である。」この第一の點が解決せられたとしても尚ほ第二の點が残つてゐる。それは、推移の最善の方法を與へることである。「當時流行の状態にあつたすべての社會主義的學派からの離反が、既に彼のこの處女作に現はれてをり、社會改造の問題は少くとも、彼自身にとつては、完全に明瞭にされてゐるのである。ブルウドンの著作の運命並にすべての事務的の配慮が彼をして、一八三九年の九月に、その故郷に歸らしめた。かゝる間にベサンヌ學

士院のその被保護者に對する陰密なる恐怖は漸次公然たる憤怒に變轉した。僧侶はこのプルウドンの著述に對して發賣禁止を命じ、人々はこの年若き植字工の「輕卒なる原理」を非認せんとした。然かもこのことは、單に天空に現はれた最初の一味の暗雲に過ぎぬ。凄愴たる暴風は既に來らなければならなかつた(註一〇)。

註一〇 Müllberger, Proudhon. Ss. 3-22.

一八三九年の末、プルウドンは巴里に歸つた。彼は直ちに仕事にとりかゝつた。彼の友人アッカアマンは少し以前に伯林に去り、同時に親友ベルクマンはストラスブルヒに去つて、彼は主都に獨り淋しく生活しなければならなかつた。それと同時に彼を襲つたものは貧困であつた。プルウドンは貧困と闘ひながら、よくこれに耐えたのは、彼の研究と勞働のためとであつた。彼は既に「日曜日論」を忘却して、他の新らしい勞作に従事した。十二月彼は友人ベルクマンに書いてゐる。「この著作は、その思想の新鮮なること、確信とに對して、半ばしか意識してゐない若人の著作ではない。」僕は君に後便でそれについて書かふ。三ヶ月中にはそれを仕上げなければならぬ。そのときまで、僕はまだ巴里に止まるつもりだ。それ以

上長く僕は持ちこたへることは出來ない。」而して一八四〇年二月二十二日にプルウドンは同じ友人に手紙を送つた。「僕の著作の表題は次の通りだ。——尙ほこのことを秘密にして置いて呉れることを君に願ひする。——『財産とは何ぞ、盜奪である、または政治的、市民的及び産業的平等の理論』(Ou' est-ce que la Propriété? C'est le vol ou Theorie de l'Égalité politique, civil et industrielle) といふのだ。僕はそれをベッサンソンの學士院に獻じよう。その表題は恐愕に値するものである。乍併、人は余に近くことは出來ぬ。余は論證者であり、余は事實を分析する。人は今日最早、あゝる人が他人を損傷することなく、感情を害する眞理を語つたからといつて、これを罰することは出來ぬ。乍併、表題は恐愕的なものであるが、著作そのものに至つては、尙ほ一層多く不快なるものであらう。もし、僅か一の熟練で、敏活なる出版者を發見し得るならば、公衆は直ちに恐駭するであらう。」(註一一)

註一一 Müllberger, Proudhon. Ss. 22-23.

三

この著作は一八四〇年六月末に現はれた。プルウドンは前掲の奇警なる表題

を變更して「財産とは何ぞや、法律及び統治の原理に關する研究」(Ou est-ce que la Propriété? Recherche sur le principe du droit et du gouvernement)とした。プルウドンはこの著作を刊行するに當つて、發行書店に二百三十部を自分の費用において引き受くることを約束したのであつたが、發行書店は尙ほこのプルウドンの劃期的著述に對して、何等の廣告をも敢えてしなかつたのである。然るに最初の二百部は十四日間に販賣せられた。プルウドンは大なる希望をもつて、この著述を刊行しただけに、その最初の効果に満足しなかつた。彼はこのことについて、ベルクマンに簡單に書いてゐる。「この著書ももつと簡潔に書いてゐなかつたならば、この書の影響は甚だ著しいものがあり得たらうが、現在の影響は讀者に對して、驚異を起させることであり、而して、尙ほそれ以上には、讀者をして熟考することを強制することである。それにも拘らず、僕が既に君にいつたやうに、色々の評論家並に評論記者にこの著作を送つたにも拘らず、未だ何の記事も批評も出ない。恐らく今後も出ないであらう。」(註一二)

註一二 Milberger, Proudhon, S. 23.

プルウドンはこの著作を、彼が給費生となつてゐたペサンソンの學士院に捧げた。彼はペサンソン學士院に捧げる文に書いてゐる。「人民を擁護し、彼等に何を希望すべきか、そして何を恐るべきかを語るは諸君である。諸君の使命と性質とは眞理の宣明に存するのである。……願くは諸君が私と同じく平等を愛好されることを。我が國家の永久的幸福のために、諸君がその宣傳者となり、その傳令者にならんことを。私が諸君の給費生の最後の者たらんことを！ 私の希願の内、これが貴院に對し、相應はしく、而して私にとつても亦最も榮譽あるものである。」(註一三) このペサンソン學士院への獻呈に對して學士院は左の如き覺え書をもつてこれに答へたのである。

「會員はシユアール給費受領生により、『財産とは何ぞや』なる表題を以て昨年六月出版され、而して、著者によつて學士院に捧げられた小冊子に關し、學士院の注意を促してゐる。彼は本學士院が公然この刊行物に包含せられた反社會的信條に對するあらゆる責任を、正義、信條並にその權威に基づいて、否定すべきであるとの意見を抱懷し、その結果彼は左の條項を要求した。

- 一、學士院は最も形式に適應する方法において、ミューアール給費生の著作をもつて、その許可なくして公刊されたもので、且つそれは學士院會員の主義と正反對の意見を適用せるものとし、これを否認し、且つ非難すべきこと。
 - 二、彼がその著作の第二版を出版する際にはこの献書を削除すべきこと。
 - 三、此の學士院の決議は記録すべきこと。
- 此等の三つの提案は投票の結果採用せられた。(註一四)

註一三 Proudhon, *Qu'est-ce que la Propriété? What is Property?* Translated by Jucker. p. 31.

「財産とは何ぞや」新明正道譯原著者序文八—九頁

川引文は大體において新明譯に従つてあるが、英譯を参照して、改譯引用した箇處も多い。一々指摘しては置かなかつた。

註一四 *What is Property?* p. 32.

財産とは何ぞや、一〇頁

かくの如きが彼の著作のブサンスン學士院に對する献呈の結果であることもに、この私有財産を非議した著作は、彼を全く絶望に陥し入れたのである。ベルクマン宛の書翰によると、彼のすべての友人も、好意を示して呉れた人々もすべて彼の

の前から遠ざかり、彼は全く絶望であるといつてゐる(註一五)。

註一五 *Milberger, Proudhon*, S. 24.

プルウドンのこの心配はその當座のことに過ぎなかつた。「財産とは何ぞや」はその刊行後、一般の注目讃嘆の的となつた著作は少ない。プルウドンはこの書において、無遠慮にも現代の病弊の最深所を衝き、一步一步、この病弊の秘密を暴露するその廣汎なる事實的研究によつて、學界の明星となりつゝ、當時第一流の法學者並に經濟學者に對する皮肉なる批評によつて、彼の否定的批判的著述の内容を教養のない階級の間にさへ進出せしめたのであつた。刊行後間もなく、再版を重ねたのである。これは勿論當時の佛蘭西において、何等注目に値するほどの法律哲學的著述の現はれなかつたのにもよるのであるが、尙ほ彼の著作の内容の然らしめたものといふことが出来るであらう。プルウドンは實にこの著作によつて、彼の希望したやうに、當時の最も急進的な社會主義者中に數へらるゝに至つた。彼は單にたゞ大衆の中にかく認められたのみでなく、學者間においても、かくの如く認められたのである(註一六)。例へば「彼の友人、及び内閣の前で私——プルウド

ン——を辯護し、そして無智であるとともに常に盲目である裁判所の打撃から私を救済して呉れた經濟學者ブランキイなどは、プルウドンの才能を認め、た有能なる學者であつて、プルウドンは實に「財産とは何ぞや」の第二部を彼に獻げてゐ、彼もまたこれに對して、甚だ丁重なる書翰を送つて、「人間理性の最も有力なるモオタアを廢止せんとする」「財産の廢止を擁護した」論者プルウドンの學的才能を認めてゐるのである(註一七)。

註一六 Lorenz Stein, Der Sozialismus und Kommunismus des heutigen Frankreichs. 1842. S. 320.

註一七 財産とは何ぞや 著者序文一〇、一一七頁參照。

四

佛蘭西大革命以來の思想的運動を觀察するに當つて、必らず、その精神生活の一般的基礎である平等の觀念を見出すのである。而して財産權一般の是認に對する問題は歴史的について、平等觀念の當然の結論に過ぎないといふのが、當時までの一般の歸結であつた。プルウドンもこの平等の觀念と財産との關係に立ち歸へつて、論議した。何となれば、すべての人は、財産は正當なりやの問題に對して、何

の躊躇することもなく、財産の正當性について答へたのであつて、「現代にいたるまで完全に自分の言葉の意義を自覺して否と答へた人は唯一人もないからである。」(註一八) 而して、プルウドンは財産の正當性を否定した。彼は財産を盜奪であるとした。「財産は盜奪である。」彼はこの命題をもつて、「人間觀念の革命」であるとした(註一九)。乍併、彼はこれをもつて社會生活のすべてを破壊しようといふのではない。「私は如何なる組織をも建設しやうとはしてゐない。私は特權の廢止、奴隸制度の撤廢、權利の平等、及び法の支配を要求する。唯だ正義あるのみ、これが自分の議論のアルファであり、オメガである。」(註二〇) 私は無秩序の代表者でもなければ、叛亂の煽動者でもない。私は歴史より數日を先驅してゐるのである。私は、我等がその發達を知らんとしても知ることの出来ない眞理を暴露してゐるのである。私は我等の將來の憲法の序文を草してゐるのである。我等の臆斷をして逞しうせしめるならば、諸君には、不遜と見えるかも知れないこの命題——財産は盜奪である——は、實は來るべき雷電の際に我等を防護する避雷針として承認せらるべきものなのである。(註二一)

註一八 財産とは何ぞや 四一頁

註一九 財産とは何ぞや 三頁

註二〇 財産とは何ぞや 五頁

註二一 財産とは何ぞや 三頁

プルウドンはこの根本的命題の説明の概略並に順序を次のやうにいつてゐる。
「二、我等は先づ財産を擁護するために主張せられたあらゆる議論を正常なるものと看做し、唯だ、その原則を探究するに努める。その後で、我等はこの原則が財産において、忠實に表現せられてゐるか如何かといふことを確めるのである。事實上、財産は結局正義以外の根據においては、擁護することが出来ないから、正義又は尠くとも正義の意向が必然的にあらゆる財産擁護論の根底に横たはつてゐなければならぬ。そして他方において、財産権は感覺により識別さるゝ事物の上のみ行使せらるゝものなるが故に、客觀化せられて姿を没してゐる正義は謂はゞ代數學上の公式の形式を取らねばならぬ。この探究法を以て我等は財産擁護論は、如何なる議論にせよ、常に、そして必然的に、平等即ち財産の否定にいたるものなることを直ちに證明することが出来る。」

この第一の部分は前の二章を蔽ふてゐる。第一章は占有、我等の権利の基礎を論じ、第二章は財産及び社會的不平等の原因と考へられた勞働と才能とを論ずるものである。

前章は占有の権利が財産を妨害し、後章は勞働の権利がこれを破壊することを證明するであらう。

二、次に、財産が必然的に平等と關聯してのみ存在するものと考へらるゝに拘らず、この論理の必然に反して、平等が存在しないのは、何の理由に基くのであるかを發見しなければならぬ。この新らしい探究もまた二章を蔽つてゐる。第一に、財産それ自體の事實を考察し、我等はこの事實が實在してゐるか、これが存在してゐるか如何か、これは可能であるか如何かを討査する。

最後に、最後の章において、我等は心理學の助を借りて、人間性質の根柢を究め、正義の原則——その公式と性質を發見するであらう。かくして我等は正確に社會の有機的法則を敘述し、財産の起源、その創設の原因、その長き歴史、目睫の裡に迫まれるその斷末魔を説明し、財産と盜奪との同一なることを明確に提唱す

るであらう。而してこれらの三つの偏見——人間の主權、條件の不平等及び財産——が必竟同一のものであつて、此等は相互に還元又は代置することの出来るものなることを解明した上は、矛盾の原則によつて、政治と權利の基礎をこれから推論することは、雜作もないことである。これをもつて我等の探究は終るのである。(註三三)

註三二 財産とは何ぞや 四一—四三頁

プルウドンはかくの如き綱領をもつて、その研究に従つた。乍併、彼の研究方法は、體系的な獨逸の哲學者などに見るやうに、直ちに現象の本質論に入るのではない。彼は、占有の本質または勞働の本質に關する哲學的體系的研究にあるのではない。彼の批判は個人的であり、消極的である。従つて、彼の論ずるところは、彼の問題の最も手近かなる部分からである。彼は先づ從來の哲學者及び法律學者によつて、財産の不可侵性並びに最高是認のために主張せられた學說及び見解を検討することによつて始めたのである。この方面こそ、プルウドンが勝利の確信をもつて活動し得た範圍なのであつた。彼は個々の思想家及び學者をその批判の

對象とした。この内には、ツウリエ、デステュー・ド・トラシイ、セイ、スミス、クウザン、ア
ンチロン、グロチウス、ポッチェール、を含み、更らに法典にまでに及んでゐる。プル
ウドンはこれらの批判の對象の中心的文章を理解検討することによつて、これらの
の財産擁護論並に法典における財産理論の無内容と矛盾とを剔抉し、これらの理
論及び法文によつては、財産權の是認は證明されてゐないといふことを承認せし
めんとしたのである。彼はその被批判者に對して、無遠慮に罵詈雑言の言葉を與
へ、且つこれを克服した。この批判の方法は、ある意味において、正しい方法でなか
つたことも、事實であるが、然も、かくの如き批判が、この方面において避くべからざ
る方法であつたことも、また事實である。當時の佛蘭西思想界は思索すること甚
だしく、従つて、佛蘭西思想界の傾向は、ある教義の代表者の主張によつて、全く決定
せらるゝ有様であつた。而して、これらの思想家こそ、彼等の獨斷の眼から覺醒せ
られなければならなかつた人々だからである。この目的のためには、プルウドン
の著作は大なる意義を有するとともに、プルウドンの學說に對するブラスキイの
高き評價の理由も實にこゝに存するのであつた。このことはプルウドン自身も

よく自覺するとともに、最もその精力を集注したところであつた。勿論彼の科學に對する貢獻は、彼のこの著作のみで終るものではない。この著作の意義はその批判的方面にある。この批判を通じて、新らしき法的觀念の建設せらるべきを示したのである。この批判によつて、從來行はれた財産權是認論は最早何等の意義をも保持せざるに至つた。人あつても、個人的財産是認の理由を確立せんとするならば、彼は眞面目に、確固たる理由をもつて、これに従はなければならなくなつたのである。この點において、佛蘭西はプルウドンの「財産とは何ぞや」に感謝すべきである(註二二)。

註二二 Stein, Der Sozialismus u. Kommunismus. Ss. 323-324.

五

財産權擁護論——その占有説と勞働説——を克服したと信じたプルウドンはその法律哲學的方面から轉じて、更らに財産の經濟學的檢討に移つてゐる。これが「財産とは何ぞや」の第四章を形成するものである。彼はこの章において、「財産の不可能」に關する十箇の命題を設定して、一々これを論證してゐる。こゝにおいて

も、彼はセイを始め、個人主義傾向に屬する諸經濟學者を批判するとともに、彼の時代に於ける社會主義者、サン・シモン、フリエ並にその學徒の説明提案について、批判してゐる。彼の命題の一々について、説明することは甚だしく紙面を要するので、その二三を擧げて見ると、第一命題「財産は不可能である。何となれば、それは無に對し有を要求するものだからである」(註二四)。「第三命題「財産は不可能である。何となれば、一定の資本を有する生産は、財産に非ずして、勞働に比例するものだからである」(註二五)。「第五命題「財産は不可能である。何となれば、若し夫れが存在するならば、社會は自らを食ひ盡すことになるからである」(註二六)。「第六命題「財産は不可能である。何となれば、夫れは壓制の母であるからである」(註二七)。「第十命題は「財産は不可能である。何となれば、それは平等の否定だからである。」といつてゐる。彼はこの命題の展開をもつて、前の諸命題の摘要に當るものだといつてゐるので、以下に、それを掲げる。

一、生産物は、たい、生産物に、よつてのみ、購買せらるゝといふことは、經濟的正義の一原理である。財産は、それが效用を生ずるといふ理由の下にのみ、擁護し得

るのであるから、それが何ものをも生産しなければ、永久に非議せらるゝのである。

三、労働は生産物によつて均衡せしめられねばならぬといふのは、一の經濟法則である。財産をもつてすれば、生産はその價值以上の費用を要することは一の事實である。

三、も一つの經濟法則。資本が與へられた場合、生産は資本の分量によつては、なく、生産能力によつて測定せられる。財産は労働に何等の顧慮することなく、資本に應じて、収入を要求するので、原因及び結果間の平等の關係を認めなく。

四、及び五、絹を紡ぐ昆蟲のやうに、労働者は決して、彼自身の爲にのみに生産はしない。財産は、二倍の生産物を要求して、これを獲得し得ないときは、労働者を掠奪し、彼を殺戮する。

六、自然は各人に、たゞ一の精神、一の心、一つの意志を與へた。財産は、一個人に複數の投票を許して、彼が複數の精神を有するが如く想像する。

七、效用を再生産し得ないすべての消費は破壊である。財産はそれが消費し、または蓄積し、資金化するにせよ、それは不生産と死との原因である。無用を生産する。

八、自然権の充足は常に平等を發生する。換言すれば、事物に對する権利は、必然的にその事物の所有によつて、平衡せらるゝ。かくて、自由に對する権利と自由人の状態との間には、均衡があり、平等がある。父たる権利と父たることの間には、均衡がある。安寧に對する権利を社會的保證の間には、均衡がある。乍併増加の権利とこの増加取得との間には、何等の均衡がない。何となれば、あらゆる新らしい増加は、それととも、権利を他者に持ち去り、後者は第三者に、かくて永久にこれを續けるからである。財産は、その目的を成就することを得ないので、自然に反し、理性に反する権利である。

九、最後に、財産は自己生存的でない。權力にせよ、欺瞞にせよ、何等かの外的原因が、財産の存立と行動には必要である。換言すれば、財産は財産に對等なるものではない。それは否定であり——幻想であり、無である(註二八)。

以上のやうに、財産の經濟的不可能を主張したプルウダンは、財産否定の當然の

結果として、財産の否定及び平等の確立のための新社會組織を提案しなければならぬ。

註二四 財産とは何ぞや 二二〇頁

註二五 財産とは何ぞや 二四〇頁

註二六 財産とは何ぞや 二五六頁

註二七 財産とは何ぞや 二九一頁

註二八 財産とは何ぞや 三一三—三一五頁

What is Property? pp. 217-218.

六

「財産は不可能であり、平等は存在しない。吾々は前者を憎悪する、然もこれを所
有せんことを希望する。平等はすべての吾々の思想を支配する、然も吾々は如何
にして、それに到達するかを知らないのである。吾々の意識と吾々の意志との間
のこの深い背反を誰が説明するであらうか。正義と社會の最も神聖なる原理と
なつた有害なる誤謬の諸原因を何人が指摘するであらうか」(註二九)。ブルウドン
は財産否定論から積極的に、これに代はるべき組織を主張する積極的の第一歩を

勇敢に踏み出したのである。

註二九 財産とは何ぞや 三一六頁 What is Property? p. 219.

ブルウドンは先づ社會構成の原理から出發する。「人間は社會において生活す
る動物である。社會とは諸關係の總計である。要するに組織——今やすべての
組織——は、一定の條件の上のみ存在する。然らば、人間社會の諸條件即ち諸法
則とは何であるか。」人間相互の權利とは何であるか、正義とは何か(註三〇)。ブル
ウドンはこれに答へて、「正義とは社會を支配する諸原理の總體である。人間にお
ける正義はこれらの諸原理の尊重と遵守である。正義を實行することは、社會的
本能に従ふことである。正義の行爲を爲すのは、社會的行爲をなすことである。
然らば、もし吾々が種々な事情の下における人間相互の行爲を觀察するならば、社
會の存在と缺如とを區別することは吾々にとつて、容易なことであらう。その結
果から吾々は歸納的に法則を推知し得よう」(註三一)。

註三〇 財産とは何ぞや 三一八頁 What is Property? p. 220.

註三一 財産とは何ぞや 三二一—三二二頁 What is Property? p. 221.

人間は、社會の原則を實現するために、その社會性を具備してゐる。人間社會性の第一階段は「吾々をして協同せしめる同情的引力」である。これはすべての動物の有する社會性であつて、あらゆる生物は、その同種の動物の社會から分離せらるゝと、孤獨にあつて、その仲間を求めらるものであるが、この程度の社會性は、吾々と同種の生物を注視することによつて、吾々に覺醒せらるゝ一種の引力である。乍併それは決して、これを感じずる人以上には到達しないものである(註三三)。「社會性の第二階段は正義である。それは他人の人格と吾々自身の人格との間の平等の承認である」と定義することが出来よう。正義の感情は吾々が動物とゞもに有してゐる。たゞ吾々のみ、その嚴密なる觀念を形成することが出来る(註三三)。第一階段における社會性は感情を有する動物の相互に感ずる引力であり、第二階段の社會性たる正義は思考及び智識に伴はれた同一の引力である(註三四)。

註三二 財産とは何ぞや 三二五頁 What is Property? pp. 224-225.

註三三 財産とは何ぞや 三二六頁 What is Property? p. 225.

註三四 財産とは何ぞや 三三一頁 What is Property? pp. 227-228.

この第一及び第二の社會性の實現を確保するためには、第三階段の社會性が現はれねばならぬ。而して、この第三階段の社會性を、動物には到達することが出来ないところであつて、たゞ人間のみの到達し得るところである(註三五)。然らば、第三階段の社會性とは何か。「寛容、感謝(余はこゝで、優秀なる勢力の讚美から生れた感謝のみを意味する)及び友情は、余が平衡または社會的均衡と呼ぶ一つの感情の三つの殊なれる陰影である。平衡は正義を變更しないが常に、正義は平衡を基礎とし、その上に、尊敬を附け加へ、かくして、人間における社會性の第三階段を形成する。平衡は吾々を必要とする弱者を援助し、彼等をして、吾々と同等のものたらしめ、吾々を強者の奴隷たらしめることなく、強者に對して、感謝と名譽との正當なる貢を拂ひ、吾々の友人であり、同等者である吾々の隣人を、交換の權利によつてとゞさへも、吾々が彼等から受取るものゝために、愛撫することを、吾々の義務であると同時に快樂たらしめるのである。平衡は理性と正義とによつて、その理想にまで高められた社會性である。その最も普通なる表現は、懇懃または叮嚀であつて、それはある國民においては、この一つの言葉に殆んどすべての社會的義務を要約して

註三五 財産とは何ぞや 三二六頁
註三六 財産とは何ぞや 三四一—四三二頁 What is Property? p. 234.

以上の三つの社會性、即ち社會性、正義、平衡の三位一體こそ、吾々を吾々の仲間と交通に導く本能的能力の嚴密なる定限である。而して、この三位一體の物質的表現は次の方式に表はされる。自然的富並に勞働の生産物における平等である。而して社會性のこれらの三階段は、各々相支持し、相含蓄してゐる。平衡は正義なくして存することは出来ぬし、正義なくしては、社會は一の背理たるに至るのである(註三七)。然るにかくの如き社會性の三位一體は從來の社會に現實せられてゐない。「條件の平等は吾々の情欲及び吾々の無智のために、今まで決して實現せられなかつた。乍併、吾々のこの法則に對する背反は、そのすべてを尙ほ必要のものたらしめた。この事實に對し歴史は永久の證言を與へてゐるし、事件の進展は、吾々にこれを啓示する。社會は平等から平等へと進歩する……疑ひもなく、人間の進歩の中には他の要素がある。乍併、國民を動搖せしめる幾多の隠れた原因の内、

財産に對するプロレタリアの定期的の爆發ほど威力があり、または恒常的で、明白なるものはない。財産が、獨占と侵掠の行動をなし、一方に人々が増加しつゝあるときは、それはすべての革命の生命原理であり、且つ明確なる原因であつた。宗教的戦争と侵略戦争とは、それが民族の絶滅しない内に、終焉したときには、單なる偶發的騷擾であつて、國民の生命の數學的進展によつて、恢復せらるゝのである。社會の没落と死滅とは、財産によつて所有せらるゝ蓄積の勢力によるのである(註三八)。

註三七 財産とは何ぞや 三四三頁 What is Property? p. 234.
註三八 財産とは何ぞや 三五〇頁 What is Property? pp. 238-239.

かくて、現實の社會における不合理は指摘された。「私は貧者の權利を證明し、富者の篡奪を指示した。私は正義を要求する。この宣言を實行するのは私の任務ではない(註三九)。「賢者が彼等の道を選び、改造の準備を爲すときは來たのだ(註三九)。財産の廢止せらるゝ來るべき社會の形態は何であるか。それは共產主義であるか。かくて、プルウドンは將來社會の原理の検討に入るのである。

註三九 財産とは何ぞや 三五一、三五四頁 What is Property? p. 239. p. 241.

七

推理力の産物である。現在の私有財産は嚴重なる障壁を繞らしてゐる。乍併、反省と理性とが、自然的なるもの、次に觀察が感覺の後に經驗が本能に次いで起るやうに、財産は共産主義に續いて起つたものである。共産主義または單純な形態における協同は社會的性質の必然的對象であり、本源的熱望である。そは人間文明の第一期である。法學者によつて消極的共産主義と呼ばれたこの社會状態に於いては、人々の關係は密接であり、彼等は土地の産物と動物の乳と肉とを互に分けたのである。共産主義は、人が生産しない間は消極的であるが、勞働と産業の發展によつて積極的となり、有機的の傾向を有するに至る。このときに至つて、人類は、平等が社會の必須的條件であるならば、共産主義は奴隸制の第一種であるを教はるのである。プルウドンはこの觀念をヘゲルの方式に做つて次のやうに表現してゐる。「社會的性質の最初の表現である共産主義は社會的發展の第一條件である。即ち措定である。共産主義の反對者である財産は第二の條件で、反措定である。もし吾々が第三の條件即ち綜合措定を發見したならば、吾々は要求さ

れた解決を有することになるであらう。扱て、この綜合措定は、措定の反措定による訂正から必然に生ずる。故に、それらの特質の最後の檢討によつて、社會性に背馳する諸特徴を淘汰することが必要である。而して、残れる二つのもの、結合が人間結合の眞の形態を吾々に與へるであらう(註四〇)。

註四〇 財産とは何ぞや 三六五—三六六頁 What is Property? p. 248.

財産と共産制とが常に社會の唯一の可能なる形式と考へられて來た。プルウドンによれば、この哀しむべき誤謬が財産の生命を長からしめたのである。「何となれば、共産制の不利益は極めて明白だからである(註四一)。プルウドンは共産主義の特徴を擧げて、それが決して、自由並に平等と兩立するものでないことを次のやうに論じてゐる。

註四一 財産とは何ぞや 三六六頁 What is Property? p. 249.

共産社會の成員は私有財産を有たないことは事實である。乍併、社會が所有者であり、單に財のみではなく、人格並に意志の所有者である。この絶對的財産の原理の結果、自然によつて人間に課せられた唯一の條件であるべき勞働は、すべての

共産社會においては、人の命令となり、従つてそれは嫌厭すべきである。反省的意志と調和しない受動的服従が嚴格に強制せられる。如何に賢明に考案せられたとしても、常に缺陷のある法規に對する忠信は、何等の不平をも許容しない。生命、才能及びすべての人間的能力は國家の財産であつて、國家は、一般的善のために、思ふがまゝに使用する権利を有する。人は彼の人格、彼の自然性、彼の才能と感情とを放擲し、みじめにも、強大にして、執拗なる社會の足下に自己を殺すのである(註四二)。

註四二 財産とは何ぞや 三六八—三六九 What is Property? p. 250.

共産主義は私有財産とは異なる意義において、不平等である。財産は強者に對する弱者の搾取であるが、共産主義は弱者による強者の搾取である。共産主義は壓制であり、奴隸制である。かくて、共産主義は吾々の能力の自由なる行使に反對するとともに、吾々の最も高尚なる願望と最深の感情に反してゐる(註四三)。「かくの如く共産主義は、第一に、理性と感情の自然性と思想及び行為の自由を制限することにより、第二に、勤勉と怠惰、熟練と愚鈍、惡徳と徳性とをさへ、享樂の點において、平等とすることによつて、良心と平等の主權を蹂躪するものである。更らにもし

財産が蓄積せんとする願望のために不可能であるとすれば、共産主義は直ちに、怠惰ならんとする欲求のために、不可能となるだらう。然るに、財産は獨占と蓄積の權利によつて、平等を、專制主義によつて、自由を破壊するのである(註四四)。

註四三 財産とは何ぞや 三六九—三七〇頁 What is Property? pp. 250-251.

註四四 財産とは何ぞや 三七〇頁 What is Property? p. 251.

財産制並に共産主義はともに採るべからずとすれば、將來社會の形態は何であらうか。ブルウドンはこゝで、「私は無政府主義者である」といつてゐる。「私は秩序の固き友であるにも拘らず、言葉の完全なる意義において、無政府主義者である」と(註四五)。「人が平等の内に正義を求め、やうに、社會は無政府の内に秩序を求める。支配者のないこと、主權の存在しないことである無政府こそ、吾々が日々近づきつゝある政府の形態である(註四六)。

註四五 財産とは何ぞや 三八五頁 What is Property? p. 260.

註四六 財産とは何ぞや 三九二—三九三頁 What is Property? p. 264.

この無政府の社會は、ブルウドンによれば、平等、法律、獨立及び均衡の四原理を基

礎とした社會であつて、その社會の内には、次の事實を發見するのである。

「一、條件即ち手段の平等から成つてゐて、享樂の平等からなつてゐない平等は決して正義と平衡とを破るものではない。享樂の平等は、平等なる手段が供さるゝとき、自らこれを得んとすることが勞働者の任務である。

二、事實の智識の結果である法律従つて必要そのものに基礎を有する法律は決して獨立と撞着するものではない。

三、個人的獨立、即ち才能及び能力の差異に起因する私的理性の自律は、法律の限界内において、危険なく存在することが出来る。

四、睿智及び感情の領域においてのみ許容され、物質的對象については許容されてゐない均衡は正義または社會的平等を侵害することなく遵守し得るであらう。

この社會の第三形態、即ち共產主義と財産の綜合を、吾々は自由と呼ばんとする」(註四七)。

註四七 財産とは何ぞや 三九八—三九九頁

What is Property? pp. 267-268.

かくて、自由は平等であり、無政府であるとともに、無限の變化であり、均衡である。而して、自由の社會形態が實現せらるゝとき、これに照應して、次の如き命題が設定せらるゝのである。

「一、個人的所有は社會生活の條件である。財産は社會の自殺である。所有は權利であり、財産は權利に反する。

二、すべてのものは、占有の平等權を有するが故に、所有は所有者數とともに變化する。財産は自らを樹立することが出来ない。

三、勞働の効果はすべての人に同一であるから、財産は一般的繁榮の内に消滅する。

四、すべての人間の勞働は集合的勢力の結果であるから、その結果としてすべての財産は集合的で單一的となる。もつと正確にいふならば、勞働は財産を滅亡せしめる。

七、生産物は生産物によつてのみ購買せられる。

八、人は彼等が選擇によつて任意的に結合する前に、生産の物理的並に數學的

法則によつて結合してゐる。故に條件の平等は正義によつて要求せられる。尊敬、友情、寛容、稱讚のやうな嚴密なる社會法則によつて要求せられる。これらのすべては、平衡的法則の領域にのみ屬する。

九、その全機能が生産手段の平等並に、交換における均衡を維持するにある自由結合は、社會の唯一の可能なる唯一の正當なる唯一の眞實なる形態である。

一〇、政治學は自由の科學である。人による人の政治——それが如何なる名稱の下に假裝しようとも——は壓制である。社會は秩序と無政府の結合において、その最高の完成を見出すのである(註四八)。

註四八

財産とは何ぞや 四〇五—四〇六頁

What is Property? pp. 271-272.

以上がプルウドンの「財産とは何ぞや」の第一部であり、一八四〇年刊行初版の全部に渉る紹介である。勿論、現在の形態における「財産とは何ぞや」はこの外に第二部を含んでゐる。これはプルウドンが彼の學說には反對しながらも、その意義を充分に認めた經濟學者ブランキイに獻じて、彼の所論の補説となしたものであつて、第一部の説明の如きものであるから、こゝにこれを紹介しない。乍併、プルウド

ンの社會學說はこの財産論第一部の紹介のみでも、充分これを理解し得るのである。筆者が財産論第一部を比較的詳細に紹介したのも、この理由からである。もと、プルウドンの以後における學說は、この財産論に含まれた思想に胚胎し、これから發展してゐるのである。この點については、無政府主義研究家パウル・エルツパヒヤアの如きも、プルウドンの思想の大本はその「財産とは何ぞや」に表現せられてゐた。末葉の點のみに、學說上の變動が起つたばかりであるといつてゐる。而して、彼の思想の誤解され易いのは、實に彼の用語の錯雜で氣儘なものによるといつてゐる(註四九)。この點は伊太利のヘクトル・ルッソコリもまた認めてゐる(註五〇)。

註四九

Paul Elzacher. Der Anarchismus. 1900. S. 58.

註五〇

Hektor Zoccoli, Die Anarchie, Ihre Verkünder—Ihre Ideen—Ihre Taten. Übersetzung aus dem Italienischen von Siegfried Nacht. 1908. S. 75.

八

「財産とは何ぞや」の刊行が一の劃期的出來事であつて、プルウドンはこれがために一躍思想家としての地位を確保するとともに、彼に對して、幾多の論難攻撃があ

つたことは既に記した。かくの如き劃期的著述はまた如何に獨逸の思想界に反映したであらうか。

すべて近代的意義における社會主義的理論並に運動は資本主義社會の發達を前提としてゐる。而して、資本主義の發達の英佛に遅れることが多かつた獨逸は、社會主義についてもこの兩國殊に佛蘭西に學ぶことが多かつたのである。即ち第十九世紀における獨逸社會主義運動はその出發點を外國に求めたのである。大工業の發達してゐた前記の英國及び佛蘭西において、社會主義は最も傑出した代表者を有した。第十九世紀の最初の三十年間において、この兩國においては、サンシモン、フウリエ、オ、エンを中心とした既に多數の社會改良的文献が存在した。然るに、この全時期を通じて、獨逸においては、微かなるフウリエ思想の反響が聞えただけに過ぎない。而して、町人階級の代表者であるとともに、被壓迫階級の代表者でもあつた獨逸民主主義は多くの社會主義的分子をその内に藏してゐた。彼等の奉ずるところはロベスピエール、サンヂェスト、マラーの急進主義であつた。當時の民主主義の代表的思想家はハインリッヒ・ハイネとペーテルネであつたが、ハイネは

深き同情を社會主義に表し、ペルネは民主主義者として恐らく最良の代表者で著述家であるが、彼はその「巴里通信」や「社會民主主義新聞」改良者に對する参加が示してゐるやうにして、決して社會主義に反對ではなかつたのである。第十九世紀の三十年代から佛蘭西においては、社會主義運動が益々發展して來た。ブッシュエの如き、ルオの如き、ベッカアの如き、コンシデランの如き、カッペの如き、ルイ・ブランの如き、プルウドンの如き思想家が前代の第一流の社會主義思想家の事業を繼承してゐた。而して、巴里においては、大衆がこの新思想を實行に移さんとしてゐた。かゝるときに、獨逸においては、その最初の勞働運動は起り、理論的社會的文献は成立するに至つたのである。かくの如き情勢が必然的に佛蘭西社會主義との接觸を齎したのである(註五一)。

註五一 Georg Adler, Geschichte der ersten sozialpolitischen Arbeiterbewegung in Deutschland mit besonderer Rücksicht auf die einwirkenden Theorien. 1895. Ss. 2-3.

プルウドンの「財産とは何ぞや」は獨逸社會思想家の佛蘭西社會思想に對する接觸の漸く繁からんとするときに出た。而して、佛蘭西本國において、著しきセンセ

エシヨンを惹き起したこの著述が獨逸に相當の影響または影響を起してゐることとは、當然の事實といはねばならぬ。

ハイネ及びベェルネの巴里通信は佛蘭西社會主義についての記述を含むものであるが、佛蘭西の社會主義を一個の現實的社會的運動として、社會史的、社會學的に記述した最初のもは、恐らくロレンツ・フォン・シュタインの「現時の佛蘭西における社會主義と共產主義」(一八四二)であらう。この著書の社會思想史的意義については、他の機會に論じたのでこゝには省略する(註五二)。更らにカアル・グリュンの「佛蘭西及びベルギーにおける社會運動」(一八四五)がある(註五三)。更らに断片的なものとしては、アアノ・ホルドルウグの「佛蘭西社會主義に關して四十年代の初めに書かれた諸論文もある」(註五四)。

註五二 加田哲二 社會學者としてのロレンツ・フォン・シュタイン「哲學」第三輯 一—八八頁参照

註五三 Karl Grün, Die soziale Bewegung in Frankreich und Belgien. Briefe und Studien Darmstadt. 1845.

註五四 Arnold Ruge's Sämtliche Werke, Fünfter Band. Studien und Erinnerungen aus den Jahren 1843 bis 1845. Leipzig. 1850.

この内シュタインの著書は最も早くして、最も系統的論述を佛蘭西社會主義に對して行つたことは、社會思想史家の一致せる意見である。この著は一八四二年に刊行せられたものであるが、當時の獨逸讀書界に對する影響については、ロッシュヤアの有名な言葉である。曰く「一八四二年ロレンツ・フォン・シュタインがその現時の佛蘭西社會主義及び共產主義に關する有名なる著述を公刊したとき、その内容は大部分の獨逸公衆に對しては、宛かも遠方の國の童話の如く響いたのである」(註五五)。この著書において——それはプルウドンの主著刊行後二年にして刊行されたのである——既にプルウドンを論じてゐる(註五六)。シュタインは、この新らしい思想家をもつて、佛蘭西革命の傳統的思想である自由及び平等の新らしい展開者として見てゐる。而して、プルウドンは自由と平等との新らしい意義を展開するに際して、新時代の最も緊急重大な問題である私有財産を問題とすることによつて、一方において財産の不可能とその廢止とを主張するとともに、他方において個人的所有の必然性を主張し、この組織を無政府に求めた點に、社會思想史上の重要な意義を認めてゐるのである。シュタインはプルウドンの無政府主義將

來社會における國家の廢除といふ點を、自らのヘエゲル主義即ち國家至上主義の立場から評論し、兩者が相對立する思想であることを明かにし、プルウドン流の無政府主義が決して、獨逸の社會思想と一致してゐないことを可成に強調した。このシュタインのプルウドン評は一八四八年刊行の増訂現時の佛蘭西における社會主義と共產主義^{註五}においても繰返されてゐるのである。たゞシュタインは、ブルヒ、サン・シモン並にその學徒をもつて佛蘭西社會主義における主潮として、プルウドンその他をもつて傍系としてゐることは、決して正鵠を失してゐる議論ではないし、またヘエゲル學徒としてのシュタインの立場からすれば、プルウドンの社會思想史上の意義を認めながらも、これに同感し得なかつたことは當然のことではなくてはならぬ。

註五五 Wilhelm Roscher, Geschichte der National-Oekonomie in Deutschland. 1874. S. 1020.

註五六 Stein, Der Sozialismus und Kommunismus. Ss. 317-330.

九

シュタインの研究は佛蘭西社會主義に對する綜合的批判的のものであつて、こ

れに對する同情的贊同的のものではなかつた。プルウドンに對しては殊に然りである。然るにプルウドンは獨逸において、多くの新思想家によつて、その支持者——その多くは漸次的のものではあつたが——を見出してゐるのである。四十年代の初めに至つては、サン・シモン並にフウリエの學徒は、顧みられること極めて少なく、共產主義者の多くは牢獄に呻吟するか、理想社會(イカリヤ)を夢想し、ピエール・ルロウは哲學的冥想に耽り、ヂョオデ・サンドは小説に没頭してゐた。このときに當つて「財産は盜奪なり」といふプルウドンの提唱は支配階級を恐怖せしめるのに充分であり、且つ新らしさを求める青年の心を惹くに足りた。かくてプルウドンの學説は一の國際的意義を有するに至つたのである(註五七)。私は以下、獨逸におけるプルウドンの支持者について語らうと思ふ。

註五七 Max Nettlau, Der Vorkämpfer der Anarchie. 1925. S. 154.

先づ第一に、プルウドンの影響を受けたものは、獨逸最初の哲學的共產主義者モオゼス・ヘッス(Moses Hess. 1812-1875)であつた。彼のプルウドン支持は漸次の間であつて、後に彼はプルウドンから離れ去つたのである。而して、彼のプルウドン支

持の時代は、ゲオルヒ・ヘルツェによつて編輯刊行せられた「スイスよりの二十一ボ
オゲン」に寄稿した「社會主義と共產主義」並に「行爲の哲學」によつて代表せらるゝ時
代である(註五八)。ヘッスは前掲のシュタインの佛蘭西社會主義論並にその内に現
はれたブルウドン論に對して著しくその評價を異にしてゐる。ブルウドンにつ
いては、ヘッスは社會主義及び共產主義を辯證的に觀察する見地から、シタインが
彼を佛蘭西社會思想家中の傍系に數へたことを非難し、且つシュタインの著書に
對して「觀念なき編纂等の批評を與へてゐる。この一事をもつてするも、ヘッスが
如何にブルウドンに傾倒しつゝあつたかが明かである(註五九)。

註五八

Netlau, op. cit. Ss. 157-158.

Ein und Zwanzig Bogen aus der Schweiz herausgegeben von Georg Herwegh. Erster Teil 1843.

“Sozialismus und Kommunismus” “Philosophie der Tat” von Moses Hess. 此れらの論文は次
の書に収録せられてゐる。 Moses Hess, Sozialistische Aufsätze 1841-1847 herausgegeben
von Theodor Zlotzki. 1921.

註五九

Hess, Sozialistische Aufsätze. Ss. 70-71.

ヘッスによれば、社會の理想は自由の實現にある。然るに、自由の觀念は從來佛
蘭西においては、共產主義並に社會主義によつて、具體的、物質的に、獨逸にあつては、

理想主義哲學によつて、觀念的、抽象的に、解されて來たのである。然るに、真正なる
自由は、兩者の即ち佛蘭西共產主義と獨逸理想主義の綜合によつて實現し得る。
從來兩者は一方的に、あるひは物質的に、あるひは抽象的にのみ考へてゐたのであ
る。真正の共產主義こそ、この兩者を辯證法的に綜合して、自由を實現するといふ
のが、上に掲げたヘッスの二論文の眼目であつた。今この根本思想を表明するヘッ
スの文章を以下に引用して置かふ。

「前世紀——第十八世紀——の課題が二重であり、一は宗教的の、一は政治的の二
つの目的に、向つてゐたので、二民族はこの事業において、自ら相分れた。獨逸國
民は主として、宗教的方面に向ひ、佛蘭西國民は就中、政治的方面に向つた。獨逸
においてはカントが、佛蘭西においては、革命が前世紀の目的と終末とを形成し
た。そのときから、近代史において、一の新らしい時期が始まつたのである。前
世紀は、一の新國家、即ち法治國家と、一の新宗教、即ち理性宗教とを建設しようと
した。然かも、そはその消極的なる目的、舊宗教と政治の破壊を現實に達するこ
とは出來なかつたので、既に一層廣汎なる目的追究の内的矛盾を示したのであ

る〔註六〇〕。「かゝる間に、人は公的生活において、破壊せられた中世的制度の新らしい形態を求めて、効なく、最後の形態も、最初の形態よりは一層近代的精神に満足を與へることなく、一の形態は他の形態を驅逐しつゝある間に、祕かに、而して全く警吏の眼を忍びつゝ、過去に對して、批判的である許りでなく、將來に對しては、組織的である新思想が形成せられたのである。人は新世界の根本原理に向ふことを始めた。獨逸においては、フイヒテが初めて、勿論未だ幾分粗野ではあつたが、精神の自律を叫んだ。佛蘭西においては、吾々は、バブウフにおいて、統一的社會生活の最初にして、然るが故に同様に尙ほ粗野なる形態の出現を見るのである。通俗的にいへば、獨逸においてはフイヒテから無神論が、佛蘭西においては、バブウフから共產主義即ち今やプルウドンが見事に表現したやうに、無政府即ちすべての政治的支配の否定、國家または政治の概念の否定が始まつたのである〔註六一〕。

「バブウフの共產主義とフイヒテの觀念論とが、それ特有なるニヒリズムのため、自らを滅ぼした後に、吾々は獨逸においては、シェリングとヘーゲルが、佛蘭西においては、サンシモンとフウリエが出現するのを見る。新時代の原因たるすべての生活の絶對的統一は獨逸においては、抽象的觀念論として、佛蘭西においては、抽象的共產主義として、自らを表現したのであるが、今やその具體的内容をそれ自身から引き出さんとしてゐる〔註六二〕。」「プルウドンが『財産とは何ぞや』の問題に對して『それは盜奪なり』と答へたのは、最も肯綮に當つてゐた。佛蘭西並獨逸精神は、新時代の原理を眞理たらしめた。乍併、この眞理を再び生活の中に實現するためには、この眞理の二要素、即ち人格的自由と社會的平等とを再び結合しなければならぬ。一方において、絶對的平等即ち佛蘭西の共產主義なく、他方においては、人格的自由、即ち獨逸の無神論なくしては、人格的自由も、社會的平等も現實的眞理たることを得ない。客觀的世界における對立及び隸屬の状態が認識せらるゝ間は、即ち政治が世界を支配する間は、天界の政治の束縛からの世界の解放もまた考へることは出來ない。宗教と政治とは共に起ち、共に滅びる。何となれば、精神の内的不自由、即ち天界の政治は、外的不自由を助け、而して、外的不自由はまた内的不自由を助長するからである。對立と不自由の原理である

宗教は必然的に、共產主義の否定へと導くが故に、共產主義、即ち共同生活の状態においても、宗教が考へ得られないと同様に、無神論即ち精神的自由の状態においてもまた、政治を考へることは出来ないものである(註六三)。

「一方においては、主觀的自由として、他方においては、客觀的平等または正義として表現せられてゐる真理の本質的特徴は統一であるが、この特徴が佛蘭西並に獨逸の近代的精神傾向の眞の原理である(註六四)。

註六〇 Sozialistische Aufsätze, Ss. 62-63.

註六一 Sozialistische Aufsätze, Ss. 63-64.

註六二 Sozialistische Aufsätze, S. 65.

註六三 Sozialistische Aufsätze, Ss. 67-68.

註六四 Sozialistische Aufsätze, S. 70.

前述のやうに、この自由と平等とを結合する社會は無政府の社會である。こゝに、ヘッスのプルウドンに對する支持點がある。然るに前掲のシュタインは、この點に獨逸的ならざるものを發見した。シュタインは中央ヘゲル學徒として、自由と平等との綜合は、國家によつて始めて可能なることを述べてゐるのであるが

(註六五)、プルウドンの場合についても、この立場から、プルウドンに批判を加へてゐる(註六六)、然るにヘッスはこの點について、極力プルウドンを支持し、國家と共產主義とは、決して、兩立し能はずとしてゐる。「いふまでもなく、原理的には、統治形態は同様なものである。すべての統治形態はその本質上絶對的に、自由と平等とに對立してゐる。専制政治から共和制にいたるまで、市民的社會から直接に發生した世襲王制から、國家形態における個人的財産の自然的要素を克服した投票多數による選舉政治にいたるまで、正しく尙ほ未だ支配と隸屬とが存する。最良の場合においても、少數が多數によつて支配せられる。乍併、代議制は現在の大國家においては、一の必然であるが、同時に、最も急進的なる選舉法においては、多數の支配もまた一の幻想的のものであることを必然たらしめた。多數は必然的に少數に變ずる。少數が支配したゞ支配し得る。乍併、少數もまたたゞ幻想的權力を有するに過ぎない。少數が民衆を認めるや否や、即ち民衆が一の實際の勢力となるや否や、國家、即ち對立の状態が自ら辯證法的に否定し、眞の社會生活たる共同生活の状態にその地位を譲るまで、この勝負を繰り返す限り、少數者は擊破せられるのであ

る(註六六a)。見るべし、ヘッスのブルウドン支持の如何に強きかを。

註六五 拙稿「社會學者としてのシュタイン」參照

註六六 Stein, Sozialismus und Kommunismus, S. 328.

註六六a Sozialistische Aufstiege Ss. 75-76

一〇

カアル・グリュンも、一八四〇年代の初めに社會主義的轉向を見せた思想家の一人であり、ゲオルヒ・アドラアによれば、彼の思想の少くとも一の基石を形成するのはブルウドンである。グリュンによれば、社會主義は哲學の一結果である。殊にフォイエルバッハの哲學は成熟せる社會主義に發展すべきすべての萌芽を藏してゐる。彼によれば、人間がその自由意思に従つて勞働しない限り、彼は奴隸であり、個人の享樂の相異が享樂能力の差異によらずして、富者に對する貧者の隷屬、富者の專制によつてゐることは、現在の社會狀態の根本的缺陷である。この害惡に對しては、立憲主義は何等施すところがないのである。かくて、モンテスキューの國家は確立せられた隷屬であり、ルッソウの國家は外觀的自由における隷屬である。すべての所謂政治的自由は窮極において、無産者に對する有産者の聯合で

あり、無智の大衆に對する狡猾なる少數者の結合に外ならぬ。大衆を制御するためには、先づ信仰と宗教を與へる。この結果が亂れて來ると、警察と裁判と、後には法律を與へる。これが憲法の秘密である。一般に國家の改革は利するところがない。何となれば、國家自らが一の抑壓の原理だからである。故に國家が廢止せられ、その代りに、自由社會が置かれなければならぬ。かくの如くして、現在のすべての苦惱の根源であるあらゆる形態における貨幣、賃銀勞働、利潤、交換價值をこの世界から驅逐する。こゝにおいて、最早相續權も、法律も存在しない。何となれば、法律はその最善なる場合においても、少數者に對する多數者の專制を意味するに過ぎないからである。即ち他によるすべての統治を終焉せしめなければならぬ。自由人の完全なる自治が行はれなければならぬ。この點において、グリュンはブルウドンの誤謬を指摘した。グリュンによるとブルウドンは不平等を廢し乍ら、賃銀勞働と交換價值とを保持せんとしたからである。この場合、人は末だ舊時の奴隸制度に束縛せられなければならぬからである(註六七)。

註六七 Adler, Geschichte der Arbeiterbewegung Ss. 90-95

以上がグリーンンの一般的立場であるが、彼の自由を尊重したことは、明かに表はれてゐる。この立場から、グリーンンはプルウドンを重要視して、彼をもつて、獨逸に於けるフォイエエルバッハに比してゐる。「プルウドンはこれまでに余の知つた最初の完全なる偏見なき佛蘭西人である。彼はラインの彼岸において精神が活動するとき、何時でも、これを傾聴するために、獨逸の科學を謙遜に研究した。彼は獨逸の感情の畸形なる文章の背後の深き意義を推定するには、充分なる根本的の哲學的概念を有する。彼はユウトピヤを蔑視しない、彼は美事なる要塞を征服し、而して、戰闘において、人類のために、守備の精英を指揮せんと欲した。而して、彼は事實、獨逸哲學中の最良のものを自己のものとなし、激しい砲列を財産に向けたのである。彼はカントを理解し、ヘゲルのコロンブスの印即ち否定の否定を理解した(註六八)。「フォイエエルバッハは何を欲するか。人間を改造するために、宗教の神と哲學の絶對精神とを解消せんと欲する。プルウドンは何と欲するか。人間の本質たる勞働を尊重せんがために、財産を止揚し、有産者を無權利なりと宣言せんと欲する。フォイエエルバッハはこれを、神學者と哲學者に對して爲さねばならぬ。

プルウドンは法學者と經濟學者について爲さねばならぬ(註六九)。

註六八 Karl Grün, Die soziale Bewegung in Frankreich und Belgien, 145. Ss. 403-404.

註六九 Grün, op. Cit. Ss. 404-405.

グリーンンはこの意味において、プルウドンの重要性を認識したのである。プルウドンの思想は獨逸に反映するとともに、スイスにおける獨逸人の解放運動にも、反映してゐる。瑞西における獨逸的社會運動の盛んに行はるゝに至つたのは、ウイヘルム・ワイトリング以來のことである(註七〇)。このワイトリングの運動に参加し、然もプルウドンの思想的感化を受けたものは、ウイヘルム・マル(Wilhelm Marr)であつた。マルはワイトリングの捕縛後ロオザンヌにおける新獨逸運動に加入し、以後の新獨逸運動の一理論的精神的指導者であつた。マルはその抱懷してゐる思想をアナルヒズムと稱した。この名稱は勿論、プルウドンの著作「財産とは何ぞや」に於けるその理想の社會組織を指示したものである。マルはプルウドンの名稱とその理想社會の思想とを採用したのである。マルの社會的認識は有産者對無産者の對立の事實から出發する。近代における財産は嘗て封

建組織のやうな絶大なる權力を有する。近代的財産制の下にあつては、その手に管を持つて、その臣下から十分の税を一領主のために徴收する代官はない。領内裁判権も初夜権も存在しない。乍併近代社會においては、これらの事實が權利として認められないだけであつて事實そのものは嚴然として存在する。門閥貴族制が貨幣貴族制に代つたのみである。現在の社會に存するすべてのものは、人間の内的性質に對する專制にその基礎を置くものである。この状態に對して、必死の闘争が行はれねばならぬ。すべての強制を廢し、かくて、自由人を確認することによつて、將來社會の原則、即ち至上的個人の意識的利益の原則が實現せられるのである。マルは理想社會實現の方法を(一)平和的手段(二)陰謀的手段(三)懷疑心を起さしめる方法に分つて、前二者をもつて實現不可能なりとして、第三の方法を取るべきものとした。この手段によつて人々の現存の制度に對する信頼を打破し、間接に現制度の根底を破壊せんとするのである。就中無神論をもつて、將來革命の缺くべからざる前提とした。次に公權ポブリツァントに對する信仰を絶滅することは、自由なる人間的自己支配 (Freie humane Selbstherrschaft) の出現に對する第二次的本質的前提

であるとした(註七一)。

マルはかくの如く、無政府主義的傾向を有し、ブルウドンの影響を受けてゐたのであるが、彼の思想は幾度か變轉した。かくて、彼はブルウドン流の無政府主義から、それとは反對の共產主義へ傾くに至つたのである。

註七〇 Georg Adler, Geschichte. Ss. 17-47.

註七一 Adler, Geschichte. Ss. 51-56. Neffau, Vorkühling. Ss. 161-162.

一

ブルウドンの財産論の立場並にその獨逸における反響を説明して來た筆者は、こゝで漸く、そのテーマの最後の部分に達した。而してそれは、また「ブルウドンとマルクス」における最初の部分に相當する。ブルウドンの財産論は當時社會主義的轉向をなさんとしてゐたマルクスとエンゲルスに如何に反響したか。換言すれば、マルクスとエンゲルスは如何に、ブルウドンを評價したか。これが以下に述べらるべき問題である。

マルクス・エンゲルスの共產主義への轉向は、四十年代の初めに行はれた。而して、マルクスは佛蘭西社會主義並に共產主義の學說及び運動に接觸し始めた頃から、その轉向が行はれた。吾々はエンゲルスの共產主義的轉向を英國社會運動との接近と佛蘭西社會思想に關する豊富なる知識の獲得の時期に見得るのである。先づエンゲルスについていへば、彼はこの時代に既に歐洲における社會運動、從つてプルウドンに對する價值評價を行つてゐるのである。

エンゲルスはその父の參加經營せるエルメン・エンゲルス紡績工場管理のため、マンチェスターに赴くことゝなつた。時に一八四二年の秋である。十一月中旬旅程に上り、その途次ケルンにおいて、マルクスと通り一遍の知合ひになつた。エンゲルスはこのときライン地方の社會主義者等と少しく接觸することによつて、共產主義へ接近し出したのである。而して、その英國滞在は、この傾向を更らに促進した。英國においては、工場勞働が大資本主義の軌上を最も急速に進行して、エンゲルスの故國におけるよりは、第四階級の貧窮を顯著に、彼の眼前に開展せしめてゐた。彼のチャアチスト並にオウエン主義の指導者との交際、これに加

ふるに詩人シェレエ及びトマス・ホオドの明哲的確なる被抑壓階級の本質に關する描寫は深く彼の心底を動かした。十一月三十日、彼は「ライン新聞」への通信として次の如く書いてゐる。「洵に工業は一國を富裕ならしめる。然も工業はまた極度に貧窮にして、その日暮をしてゐる無産者の階級を形成する。彼等は確固たる所有を獲得することを得ないために、一度形成せられたこの階級は廢止せらるゝことが出來ない。一大商業恐慌がその全階級をして、食を失はしめる。一旦、かくの如き状態に置かれたこれらの人々に對して反逆する以外に何ごとか残つてゐるか。かくてエンゲルスは一部の暴動の鎮壓を描いていふ。「次のことによつて喚起せらるゝ効用は未だ残つてゐる。平和的方法による革命は不可能であつて、たゞ現在の不自然な關係の暴力的革命、即ち名門的並に工業的貴族主義の急激な破壊のみ、プロレタリアの物質的狀態を改善し得る……即ち革命は政治的のものではなく、社會的のものだといふ意識がこれである。かくて彼は階級闘争の必然性を早く洞見した(註七二)。

註七二 Ernst Drahm, Friedrich Engels. Ein Lebensbild zu seinem 100. Geburtstag. 1920. Ss. 7-8.

かゝる傾向を有するエンゲルスは、間もなくオウエン主義者並にチャアチストの指導者と接觸するに至つた。彼は一八四三年十一月四日と十八日のオウエン主義者の機關紙「新道徳世界」^{「ニューモラルワールド」}に、大陸における社會主義の發展に關する二つの論文を書いてゐる。彼がこれらの論文を書くに至つた動機は、接觸する機會を持つた多くの英國社會主義者が大陸の社會主義運動に關して、無智無關心であつたことによるのである。この論文において、エンゲルスは既に、共產主義者として現はれてゐる。従つて、彼にとつては、徹底的なる革命と財産の共有とは、最少緊急な避くべからざる必然である。共產主義は、彼によれば、英國その他の國民的特殊状態からの歸結ではなく、近代文明から、必然的に起つたあらゆる事實からの必然的結果であるとした。エンゲルスは現代のこの三大文化民族、即ち英國、佛蘭西、獨逸を理解するの意義を強調し、これらの三國における共產主義理論の種々なる起源について記述した。即ち英國人にあつては、共產主義は主として實際的のものであり、佛蘭西人にあつては、政治的、獨逸人にあつては、哲學的のものであつた。エンゲルスは、佛蘭西共產主義の歴史をもつて始めた。何となれば、佛蘭西においては、政治的

發展のすべての形態を經過して、最後に共產主義に到達する運命を擔つたからである。

先づバブウフの共產主義を記述し、これをもつて、甚だ粗野にして、淺薄なものとした。「今日既に忘れられた」サン・シモンの批判が次いた。フウリエはサン・シモンよりも高く評價せられてゐるが、私有財産の撤廢に及んでゐないといふ點に内的矛盾を藏するものとせられた。次に、特に、七月革命の經驗の影響の下における工業都市勞働者間の共產主義宣傳の結果を報告してゐる。而して、その後の共產主義、従つてブルウドンの思想について次のやうにいつてゐる。

「吾々はイカリヤ共產主義者の社會學說に歸らう。彼等の『聖書』はカベットの『イカリヤ旅行』である。……この共產社會の一般の施設はオウエン氏におけると全く同一である。サン・シモン並にフウリエにおいて、彼等が合理的なるものとして發見したものは、彼等は、その計畫の中に採り入れ、従つて、舊時の佛蘭西共產主義者より遙かに傑出してゐる。……」

共產主義の發展は、佛蘭西の最も優秀な頭腦によつて、祝福せられてゐる。形而

上學者ビエル・ルロウ、婦人權の勇敢なる擁護者ヂョルヂ・サンド、『信仰者の辭』の著者アッペ・ドラムネエ、及びその他は、多少とも共産主義學說に傾いてゐる。この傾向中で、最も傑出しゐる著述家は、兎に角、少壯なるプルツドンである。彼は二三年前にその著述『財産とは何ぞや』を公刊し、『財産とは盜奪である』との答を與へた。それは共産主義者によつて、佛蘭西で書かれた最も深い哲學的著作である。而しても、何か翻譯でも出るといふならば、この書が英語に翻譯せらるゝことを望みたい。私有財産の權利、この制度の結果として、競争不道德、貧困が、未だ嘗て、一の著作に要約せられてゐるのを發見したことがない精力と眞の科學的方法とをもつて、記されてある。尙ほ彼の憲法制度に關する記述も意義深きものである。それが、貴族制、民主制または君主制であつても、政府はすべて暴力によつて、支配せられてゐるから、すべて同様に排斥せらるべきであり、また最良の場合においてさへ、多數者の勢力が少數の弱者を抑壓するものだといふことを證明した後に、『吾々は無政府を欲する』(nous voulons l'anarchie)といふ結論に到達した。吾々は無政府を要する。何等の法律も要しない。すべての人が彼自

身に對する責任あるのみである(註七三)。

註七三 N. Rjasanoff, Friedrich Engels' Jugendarbeiten, „Der Kampf“ sozialdemokratische Monatschrift 7. Bd. 1914. Ss. 158-162.

以上の引用によつて、明かなやうに、エンゲルスのプルツドンに對する評價は甚だ高く、前掲ヘッス、グリユンの評價と殆んど相似たるものがある。この點においては、エンゲルスは彼等と、ともに、ロレンツ・シュタインと評價を異にする。

一一

マルクスのブルツドン評價は、マルクス・エンゲルスの共著——その大部分がマルクスの執筆したものであることは、エンゲルス自身の認めてゐるところである——「神聖家族」において表はれてゐる(註七四)。「神聖家族または批判的批判の批判」は、マルクス・エンゲルスが、佛蘭西並に英國における社會主義並に經濟學說の研究と、フォイエールバッハの哲學との影響から從來の唯心的哲學の見地、即ち新ヘゲル學徒としての立場から、彼等獨自の唯物史觀に到達し、獨逸唯心論哲學に對する批判として、當時の獨逸思想界の代表的存在であつた新ヘゲル學徒を徹底的に

批判したものである。この著作はマルクスエンゲルスの共産主義的立場の基礎を置いたものとして重要である(註七五)。

註七四

Die heilige Familie, oder Kritik der kritischen Kritik Gegen Bruno Bauer & Consorten. 1845. Aus dem literarischen Nachlass von Karl Marx, Friedrich Engels und Ferdinand Lassalle. Bd. II.

マルクスメーエンゲルス全集第一卷(改造社版)四七五頁以下。

註七五

Meinung, Einleitung, Ss. 65-102. 全集第一卷四八三—五二二頁を見よ

この書は巴里において執筆せられた。この時代に、マルクスはプルウドンと交際を結んでゐる。この交際はマルクスのプルウドン批判の公刊とともに断たれたのであるが、マルクスはプルウドンの死後『ゾチアル・デモクラート』誌(一八六五年)にその當時を回想してゐる。この回想は既に論敵といふ立場からなされてゐることは勿論である。マルクスはいつてゐる。「一八四四年、パリ滞在中に私はプルウドンと個人的關係を結んだのであつた。何故そのことを茲に述べるかといふに、元來彼の『ソフィステケエション』——イギリス人が商品の不純製造を指していふ言葉については、私にもある程度まで責任があつたからである。私は彼と長時間に互れる、屢々夜を徹することもあつた程の議論をしてゐる間に、ヘーゲル主義

を彼に感染させてしまつたのであるが、これは彼にとつては非常に不利益なことであつた(註七六)。

註七六

Karl Marx über Proudhon. Aus den "Sozialdemokrat". 1864. Elend der Philosophie Ss. xxvii-xxviii.

哲學の貧困 高島素之譯三五頁

一八四五年に刊行せられた『神聖家族』におけるプルウドン評價は、この死後の回想よりも、より高いものである。而して、メエリングがいつてゐるやうに、マルクスがエドガー・バウアアに依るプルウドンの惨めな翻譯に附隨した批判的の註釋なる章は、『神聖家族』中最も價值多き部分に屬する。それはエドガー・バウアアに對する論争の爲にではなく、——それは當時は尙ほたゞ特殊なる興味を有つてゐたが、今日においては、殆んど何等の興味を有つてゐない——寧ろマルクス自身がプルウドンの最初の著述に對して、採つた立場のためである(註七七)。

而して、マルクスはプルウドンの著作の意義を次のやうにいつてゐる。
「すべての科學の最初の批判が、必然的に、それが攻撃せんとする科學の前提に捉はれてゐるやうに、プルウドンの著作『財産とは何ぞや』も、經濟學の立場からする經

濟學の批判である。——法律を法律の立場から批判したこの書の法律的部分には、吾々は深く立ち入る必要がない。何となれば、經濟學の批判が主要な問題だからである。それ故、ブルウドンの著書は學問的には、經濟學の批判ブルウドンの見解に表はれた經濟學の批判で一貫せられてゐる。フィジョクラートによるマアカンチリストの批判、マアカンチル・システムの批判、フィジョクラートによるマアカンチリストの批判、アダム・スミスによるフィジョクラートの批判、リカルドオによるアダム・スミスの批判は、各々その前者を前提としてゐるやうに、ブルウドンの批判はサン・シモン並にフウリエの業績をその前提とするが故に、この仕事は始めてブルウドン自身によつて可能とせられたのである。經濟學のすべての發展は私有財産をその前提としてゐる。この根本的前提は經濟學にとつては何等これ以上の穿鑿を要しない、争ふべからざる事實である、而して、セエが素朴に告白してゐるやうに、經濟學はたゞ偶然にそれに言及してゐるに過ぎない。ブルウドンは經濟學の基礎——私有財産を批判的な研究、然も、最初の徹底的な、顧慮するところなき、同時に學問的な研究の對象とした。これは彼の爲した大なる學問上の

進歩である。經濟學を革命し、眞の經濟學を初めて可能ならしめた進歩である。ブルウドンの著書「財産とは何ぞや」は近代の經濟學に對して、シイエスの著書「第三階級とは何ぞや」が近代政治等に對すると同様の意義を持つてゐる(註七八)。

註七七

Mening, Einleitung, S. 78. 全集四九七頁

註七八

Nachlass, II, S. 127. 全集五四七—五四八頁

かくの如き意味を有するブルウドンの財産批判は何から出發したか。「これまでの經濟學は私有財産の運動が國民のために、作るらしく見える富から出發して、私有財産を辯護する見解に到達した。ブルウドンは、反對に、經濟學中に詭辯的に隠蔽せられて來た部分から出發して、即ち私有財産によつて作られた貧困から出發して、私有財産を否定する見解に到達する。私有財産の最初の批判は、勿論この事實——その中では、私有財産の矛盾に充ちた本質が最も明かに、最も烈しく、人間の感情を直接に刺衝するやうな形にあらはれてゐる——貧困の事實、不幸の事實から出發する(註七九)。ブルウドンはこの貧困の事實から出發して、如何に資本の運用が貧困を作るかといふ點を詳細に説明し、かゝる點から私有財産の止揚を主

張したのである。而して、この私有財産の止揚——詳言すれば非所有及び舊き所有方法である財産を止揚せんとするのは、私有財産の對立者である非所有が人間の全き非現實性非人間の全き現實性即ち饑餓、寒氣、病氣、罪惡、屈辱、魯鈍、凡ての非人間性及び背自然性であるから、——といふのは、實踐的に疎外せられた人間の對象物に對する關係を止揚すること、即ち人間の自己疎外の經濟的表現を止揚せんとすること、全く同一である。かくて、彼は現實の世界における財産と貧窮との對立——前者の後者に對する搾取を正しく承認した。而して、來るべき社會においては、財産に對立して所有を設立することをもつてした。社會全員に對する平等なる所有を主張した。而してこの所有は一の社會的機能を有するものである(註八〇)。マルクスは、ブルウドンのこの點に關する認識から、エドガアの認識不足を攻撃し、無産者對有産者の對立を近代社會における必然的現象として認識する。「プロレタリアと富とは對立である。彼等は對立として、一の全體を形成する。彼等は私有財産の世界における二つの形態である。對立において、彼等が占める特定の地位がこゝに問題である。私有財産は私有財産として、富として、それ自身を、か

くして、その對立たるプロレタリアを存在せしめるやうに強要せられる。それは對立の積極的方面であり、自ら満足してゐる私有財産である。これに反して、プロレタリアはプロレタリアとして、自分自らを、従つて、プロレタリアをプロレタリアたらしめたその決定的對立者私有財産を止揚すべく強制せられる。それは對立の消極的方面であり、それ自らにおける不安、解體せられたまた解體しつつある私有財産である(註八一)。

註七九 Nachlass. II. S. 130-131.

全集五五〇頁

註八〇 Nachlass. II. S. 139-140.

全集五五八—五五九頁

註八一 Nachlass. II. S. 132.

全集五五二頁

マルクスはこゝに資本家的社會における有産者とプロレタリアの必然的運命を見たのである。彼はこゝに、プロレタリアの歴史的使命を認識した。この點からいつても、彼のブルウドン評價は甚だ高かつたといひ得ると思ふ。而して、ブルウドン死後の回想においてさへ「彼——ブルウドン——の最初の述作『財産とは何ぞや』は無條件的に彼の最良の著書といひ得る。それは内容の新しさからではな

いにしても、少なくとも、思ふ儘を悉く語らんとする、その新しき大膽な書き振りから見て、眞に劃時代的なものである。彼れの知るフランス社會主義者や、共產主義者たちの文献を見ると、そこでは勿論「財産」が色々批評されてゐるといふのみでなく、またそれがユウトピスト的に「止揚」されてもゐるのである。この中でプルウドンはサン・シモン及びフウリエに對して、恰もヘエゲルに對するフォイエルバッハの如き關係を占めてゐる。ヘエゲルに比すれば、フォイエルバッハは至つて貧弱である。それにも拘らず、彼はヘエゲル以後において劃時代的であつた(註八二)といつてゐるのを見ても、マルクスのプルウドンに對する評價が當時如何に高かつたかを知ることが出来るであらう。まして、この回想起草當時のマルクスは、プルウドンの價值を一掃的に否定してゐることを想起すれば、かゝる立場のマルクスによつて、以上引用した文章のやうな評價をなほなさしめるのは、プルウドンの著書のマルクスに對する印象の深甚であつたことを證明するものでなくてはならぬ。

以上のやうに、プルウドンの「財産とは何ぞや」に對して、高き評價と同情とを持つてゐたマルクス・エンゲルスが、プルウドンに對して、論敵の立場に立つに至つたのは、「神聖家族」の刊行後二年、一八四七年プルウドンの「貧困の哲學、別名經濟的矛盾の體系」に對するマルクスの批判「哲學の貧困」の上梓以後のことである。

註八二 Elend der Philosophie, S. XXV. 高島譯本 三一三二頁

(一九二九—五—八夕脱稿)